

ジョン・フォード監督の映画に『わが谷は緑なりき』（1941年）がある。ウエルズ地方にある炭鉱町の炭鉱夫一家の物語で、ストライキや落盤事故の場面に、ついで、多くの古里の炭鉱「夕張」を思い出し胸が熱くなってしまう。

夕張は空知管内の旧産炭地の「炭鉱遺産」として北海道遺産に選ばれ嬉しくもあるが、どの炭鉱も繁栄当時の面影はなく人口も減り、ズリ山には木が茂り、炭鉱関連施設もほとんど壊されている。観光資源として生かしても、施設の設備や維持管理が大変らしい。せめて今の子供たちに、

「この黒い石（石炭）は燃えるんだよ」と伝えておこうかなあ。

ほくはよく道内を旅する。市町村合併が進みまちの数も減り、いまひとつ元気なまちが少ない気もする。小さく背中を丸めていてはアカン。北海道遺産もいろいろ、「オラがまち遺産」をつくるべ、の声。これを『オライサン』という（いわないかも）。

守り伝えたいまちの景色や建物、特産品、人物などで盛り上がる。すると、近隣のまちから「なんだべ、面白そうだな」と人が集まり、それが各市町村にどんどん広がって、いつの間にか元気な



北海道に？なればいいねえ…。例えば「まちをきれいにするべ」という心だけでも、もう大切な遺産なんですよ。

どんどん汽車に乗って旅しよう。窓の景色で季節を感じるなんていいもの。

田んぼの緑、夕焼けの海辺、収穫間近のゴシヨイモ畑、吹雪の町並み、魚臭い港町、紅葉の雑木林、学生が多い終着駅、車内の年寄り、はみんな知り合い、パソコンの会社員、駅弁をたべる家族連れ、肥った中年のいびき…ほくはウイスキーを舐めながら文庫本の活字を追う、が、そのうちに眠って

しまう。

たまに車を置き（排気ガス減）、ローカル線に揺られよう。雑草が茂る無人駅のホームに独りぼっ立つと、今そしてこれからの北海道に何が必要なのか、みんななで何ができるのか、がみえてくるかもしれない。

## 「オライサン」で元気

渡邊 俊博／わたなべ としひろ 道中作画家、デザインスタジオ・ズウ代表。1948年夕張市生まれ。夕張北高卒業後、札幌、室蘭の印刷会社、広告代理店勤務を経て79年デザインスタジオ・ズウ設立。古い町への旅をこよなく愛し、ほのぼのとした人情味あふれる作品を数多く描き続けている。旅のスケッチ展を開く一方、JR北海道PR誌の連載や「北海道おいしいもの見つけ旅」（北海道新聞社刊）などの著書も。札幌市在住。

